

IV 土地利用現況図及び土地利用履歴図

| 目 次 | |
|----------------------|----|
| 1 土地利用概説 | 76 |
| 2 土地利用細説 | 80 |
| 2.1 農地・森林・河川等 | 80 |
| 2.1.1 田・畑 | 80 |
| 2.1.2 樹園地・牧草地 | 80 |
| 2.1.3 広葉樹・針葉樹・その他の森林 | 80 |
| 2.1.4 河川・水面・水路 | 80 |
| 2.2 住宅地 | 81 |
| 2.2.1 中高層住宅地 | 81 |
| 2.2.2 一般住宅地 | 82 |
| 2.3 商工業等用地 | 82 |
| 2.3.1 工業用地 | 82 |
| 2.3.2 商業用地 | 83 |
| 2.3.3 業務用地 | 83 |
| 2.3.4 運輸流通施設用地 | 83 |
| 2.4 公園等 | 83 |
| 2.4.1 ゴルフ場・遊園地等 | 83 |
| 2.4.2 公園用地、墓地 | 84 |
| 2.5 公共施設等 | 84 |
| 2.5.1 教育文化体育施設 | 84 |
| 2.5.2 その他の公共施設 | 84 |
| 2.6 その他 | 84 |
| 2.6.1 防衛施設 | 84 |
| 2.6.2 工事中造成地 | 84 |
| 2.6.3 海浜 | 84 |
| 2.6.4 道路・鉄道 | 84 |
| 2.6.5 その他 | 85 |
| 3 土地利用の変化 | 85 |
| 参 考 文 献 | 86 |

1 土地利用概説

本図幅を地形的にみると、中央に相模川が南北に流れ、その両側に相模平野が広がっている。花水川から江ノ島にかけての海岸線には砂丘が発達している。花水川の上流部である金目川の南西には大磯丘陵、北には北金目台地がある。藤沢・茅ヶ崎から大和・綾瀬にかけて相模原台地が広がっており、その中央部に高座丘陵・座間丘陵が南北にのびている。平塚の北部から伊勢原にかけて伊勢原台地・上粕屋台地・日向台地があり、厚木西部には愛甲台地・尼寺原台地・荻の台地・中津原台地があり、その西に大山山地・高取山山地が広がる。

調査地域を歴史的にみると、先土器時代（1～3万年前）の人類の遺跡が相模原から藤沢にかけての相模原台地の縁辺部に多く発見されている。この時期はヴェルム氷期と呼ばれ、気候は寒冷で、海水面は現在よりも百数十m低下していた。このため、日本列島は大陸と陸続きになり、獲物を追いかける人々が移住してきた。現在神奈川県下には200箇所を越える先土器時代遺跡が発見されているが、8割以上は相模原台地に存在している（児玉，1983 茅ヶ崎市，1981）。長い先土器時代の後に縄文時代が始まる。一般に縄文時代は土器の研究に基づいて早期（1万～6千年前）、前期（6千～5千年前）、中期（5千～4千年前）、後期（4千～3千年前）、晩期（3千～2千百年前）に分けられている。縄文時代になると気候が温暖になり、海水面が上昇し始めた。約6千年前には現在の海面より4m前後上昇し、これを縄文海進という。この海進により相模湾が内陸まで進入し、相模川沿いでは厚木付近まで広がった。これを古相模湾という。縄文時代の人々の生活は狩猟、植物の採取、魚撈から成り立っていたので、縄文前期～中期では海と山に近い台地、丘陵の周辺部に居住していた。この時代は気候が温暖で食糧が豊富にあり、生活環境がよかったため土器の模様にもられるように高度の文化が発達した（茅ヶ崎市，1981）。

紀元前2～3世紀になると西日本を中心に稲と金属に象徴される弥生文化が発達する。弥生時代は前期、中期、後期に分けられる。関東地方にこの文化が伝わるのは中期である。この時代の人々は低湿地、後背湿地、谷底平野に水田を持つため、その近くの砂丘や台地に居住した。特に大きい水田が開拓できるところに大きい集落が出来た。例えば、藤沢の引地川流域では約200軒の住居跡

が発見されている（児玉，1983）。弥生時代の後期になると、稲作により食糧生産が安定するにしたがい人口が増加し、階級化が進み、地方に豪族が出現した。その後、古墳時代（3世紀）に入ると豪族達は各地に大きな墳墓を造った。平塚の真土に大規模な前方後円墳が発見されている。その中の出土品に京都の古墳の出土品と同じ物があった。これは相模川流域の沖積平野に広大な水田が広がり、そこに君臨する強大な豪族がいて、中央の権力者と密接な関係があったことを意味する。

古代に入ると大和朝廷が中央を統一し、地方の豪族を国造に任じて朝廷の支配を確立していった。大化の改新後、地方に国・郡がおかれ朝廷の支配がさらに進んだ。湘南地方は相模国造に属していた。神奈川県内の古代の官道は矢倉沢往還と呼ばれ、足柄峠－松田－秦野－伊勢原－厚木－愛川－相模原を通り八王子方面に通じていた。古代から中世かけては鎌倉が中心となる。鎌倉に幕府が開かれると、関東武士団の外に商工業者など町民も移住するようになる。そのため道路の整備や住宅地と商工業地の区割りなどの都市計画が必要とされた。それにともなって「鎌倉みち」と呼ばれる道路が鎌倉を中心に放射状に建設された。近隣近在の農民は食糧を生産し新興都市である鎌倉に運搬する必要が生じた（井出，1985 茅ヶ崎市，1981）。

湘南地域はこの時期に沖積低地・谷底平野は水田、台地・微高地は畑・住宅地、丘陵地・山地は森林など現在の土地利用の原形が完成したと考えられる。当時、砂丘地帯の土地利用は、砂丘が移動することと乾燥しやすいためかなり制限されたと思われる。ただ砂丘地帯の裏側の低湿地では水が得やすいので水田として利用された。鎌倉時代の相模川は茅ヶ崎付近で現在よりも東側を流れていたらしく、関東大地震の際、下町屋の南の水田に橋脚が現れた（井出，1985）。

中世から近世にかけては、鎌倉幕府が崩壊した後、湘南地方を治めた領主は幾たびか変わり、治安が悪かった。一応安定して相模国を治めたのは後北条氏であった。後北条氏滅亡の後、徳川家康が関東へ入国し、相模国は家康の支配下になった。家康は新田の開発に力を注ぎ、徳川幕府になってもその方針は継続した。江戸時代の初期である1644年から1702年の間に相模国全体で3万8千石の開発がなされた。開発地は主に湿地帯と台地であった（座間外，1984）。徳

川幕府が確立してから交通行政も整い全国主要街道に宿駅制度を設けた。本図幅では藤沢、平塚、大磯が東海道五十三次の宿駅と定められた。これらの宿駅には本陣、脇本陣がおかれ宿場町として発展した。幕府は戦略上大きい河川には橋を架けず自然の柵とした。相模川にも橋がなく、大雨の時は川止めされ、平塚の馬入と茅ヶ崎の今宿に旅人が滞在した。藤沢宿は東海道を通過する人だけでなく、江ノ島や大山に参拝する人々も宿泊や休憩をした。

幕府が鉄砲場（鉄砲の演習場）を茅ヶ崎海岸から辻堂海岸の砂丘に設置したのは江戸時代も中期にかかった享保13年（1728）ことであった。その後明治維新に至る約140年間にわたって利用された。現在茅ヶ崎市内には鉄砲道と呼ばれる当時のなごりの道路が残っている。

明治時代にはいと、新政府は廃藩置県により幕藩体制を解体し、中央集権的国家体制をつくりだした。その時、神奈川県の相模川以东は神奈川県、以西は足柄県であった。その後相模川以西も神奈川県に編入された。

明治20年横浜－国府津間に東海道線が開通し、明治22年東海道線は神戸まで全線開通した。当時は、東海道の宿場毎に鉄道の駅を設置したため、本図幅内では藤沢、平塚、大磯が該当した。その後、明治29年に茅ヶ崎駅が開設され、大正5年に辻堂駅が開設された。

私鉄については、明治33年藤沢－鎌倉間に江ノ島電鉄が開通した。大正15年神中鉄道（現相模鉄道）と相模鉄道（現JR相模線）が開通した。昭和2年小田急小田原線が開通し、昭和4年小田急江ノ島線が開通した。

湘南地域が避暑地、海水浴場の適地として発展したのは明治以後である。大磯の照が崎海岸は日本最初の海水浴場として有名である。当時、大磯には伊藤博文、安田善次郎、平塚には後藤象次郎、高山樗牛、茅ヶ崎には市川團十郎、川上音次郎、清浦奎吾（後の総理大臣）が別荘をかまえた（井出，1985 茅ヶ崎市，1981）。藤沢の海岸地帯には鶴沼館、東屋、明治館等の旅館ができ、これらの旅館には徳富盧花、田山花袋等が滞在した。近世以来民衆の遊山の場所であった江ノ島は、明治以降横浜居留地の外国人にとって格好の観光地となり、多くの外国人が江ノ島を訪れた。その中で、大森貝塚の発見者であるモースは明治10年に臨海実験所を開き、横浜の貿易商コッキングは明治15年に当時日本最大の温室を備えた植物園を建設した（児玉，1983）。

明治20年代養蚕業の発展を背景に図幅内の各所に製糸工場が続々と設立されたが、大正から昭和初期にかけて製糸工場は減少していき、その代わりに機械、鉄鋼、金属関係の工場が設立された。昭和6年に満州事変が勃発すると、日本は軍拡の時代に入り、これらの工場は各種の兵器工場に生まれかわり拡大された。

明治38年平塚に日本爆発物製造が設立され、大正8年この会社を海軍省が買収し、海軍火薬廠とした。昭和12年相模原から座間にかけて陸軍士官学校が転入し、昭和16年大和・綾瀬に海軍厚木飛行場が建設された。前述の辻堂の幕府鉄砲場は、その後、海軍の演習地として終戦まで使用された。

戦後、これらの軍事施設を連合軍が接收した。厚木飛行場、キャンプ座間、米軍通信機地は現在でも接收されている。接收が解除された平塚の火薬廠跡は工場や農業試験場等が建設された。現在は、試験場が移転し、総合運動公園として市民に親しまれている（井出、1985）。辻堂の海軍演習地跡は現在住宅団地、公園、学校、下水処理場として利用されている。

戦後、日本は驚異的な経済復興を成し遂げた。その中心である東京が発展するにつれて神奈川県にも人口や工場が増加しはじめた。昭和31年に300万であった県の人口は昭和48年に600万に倍増した。その間の年当りの人口増加は18万であった。オイルショック後、年当りの人口増加は減少しているが、それでも人口増加は年間10万人を維持している（神奈川県、1962～1986）。これらの人口増加によって図幅内の住宅地が非常に拡大した。宅地化は東京・横浜に近い相模川以東から始まり、その後、相模川以西に移動していった。戦災を強く受けた平塚を除き各市町村は人口増加に都市計画が追い付かないため道路網が整備されず、無秩序な住宅地開発がなされた。藤沢、茅ヶ崎の海岸地域や大和の駅周辺その例がみられる。しかし、その後郊外に開発された大規模住宅団地（湘南ライフタウン、厚木森の里等）は都市計画、土地利用が十分に考えられている。

工場については、戦後鉄鋼、電力、造船、自動車等重工業を中心とする京浜工業地帯が活発化し、横浜から横須賀の東京湾岸沿いに延長していった。一方、戸塚付近から東海道線沿いに家電、自動車、化学、薬品、食品等の工場が進出した。その傾向は平塚から相模川を北上し厚木方面に達している。その外、内

陸工業団地が藤沢、綾瀬、座間、伊勢原などにある。

厚木市を中心とする県央の発展は東名高速道路が完成し、陸の港としてインターチェンジが設置されたことによる。東名高速道路に付随して小田原厚木道路が完成し、国道129号、国道246号が整備されて厚木は県央の中心地となった。厚木市北西部の台地、丘陵地には大規模な住宅団地、大企業の研究所、大学等が数多く建設されており、県内で最もダイナミックに発展している市である。

2 土地利用細説

2.1 農地・森林・河川等

2.1.1 田・畑

水田は相模川を中心とする相模平野の内、海岸近くの砂丘地帯を除き、広く分布する。平塚市北西部の金目川沿いから厚木市南部の相模川右岸にかけて最も広く水田が分布する。次に広く分布するところは、座間市から寒川町にかけての相模川左岸である。その外、玉川、中津川、小鮎川、目久尻川、小出川、引地川、境川の谷底平野に細長く分布する。

畑は丘陵地、台地に多く分布する。畑は水田より住宅地として適しているので、畑と住宅地が混在しているところが多い。その中でも綾瀬市西部、平塚市北西部、藤沢市善行から六会瀬谷区北西部にはまとまって畑が分布する。

2.1.2 樹園地・牧草地

樹園地は大磯丘陵の南部と秦野から伊勢原市にかけての大山山地の東麓に広く分布し、その多くはみかん園である。厚木市北西部の台地は桑畑が分布する。藤沢市用田付近と厚木市の玉川沿いに梨園がみられる。牧草地は殆どない。

2.1.3 広葉樹・針葉樹・その他の森林

森林の大部分は大山山地の東斜面と大磯丘陵に分布する。その外砂防林として針葉樹（松）が藤沢市から二宮町までの海岸線に分布している。採石場が厚木市高取山、矢崎、市島にある。

2.1.4 河川・水面・水路

相模湾に流入している河川は相模川を中心に西から葛川、花水川（金目川）、引地川、境川である。相模川は県内最大の河川で、県内の60%の人口は相模川の水によって生活している。相模川の水は水道水ばかりでなく灌漑用水として

相模平野を潤している（井出，1985）。

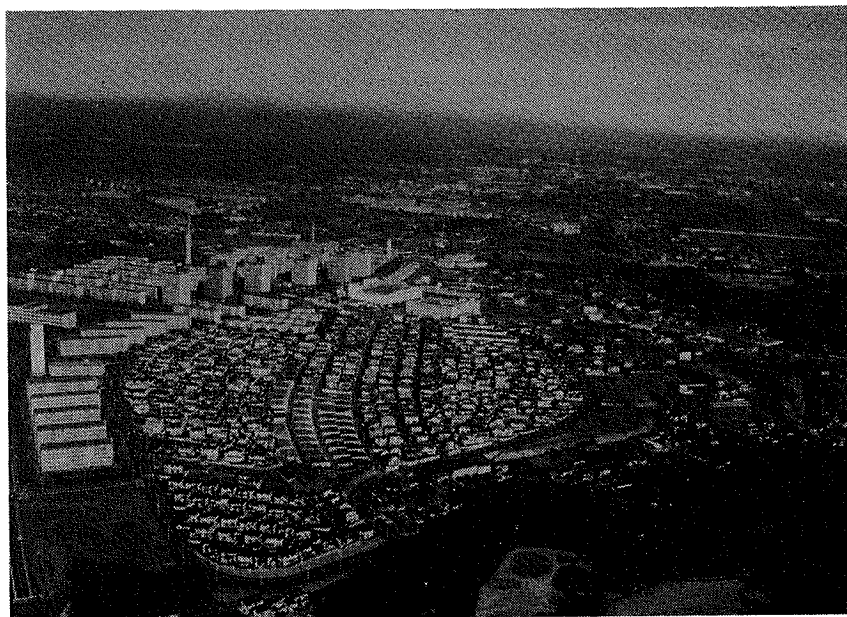
2.2 住宅地

2.2.1 中高層住宅地

中高層住宅は主に住宅都市整備公団、県住宅供給公社、県市町村が建設した団地が中心である。その外民間のデベロッパーが開発したところもある。

藤沢市では辻堂、藤沢、善行、ライフタウン、茅ヶ崎市では浜見平、鶴が台、平塚市では高村、大和市では上和田、いちょう、横浜市泉区では上飯田、いちょう、ドリームハイツ、綾瀬市では寺尾、海老名市ではさつき、みずほ、座間市では東建ハイツ、厚木市では森の里、緑が丘、毛利台、宮の里、鳶尾、秦野市では下大槻に中高層住宅がみられる。

鉄道の駅周辺に数多くマンションが建設されているが、1～2階は商店の場合が多いので商業地域として表示されている。



ほぼ開発が終了した藤沢市湘南ライフタウン（昭和63年1月）

2.2.2 一般住宅地

一般住宅地は鉄道の駅と密接に関係している。藤沢から平塚までの東海道線沿いには住宅地が隙間なく分布する。大磯から先は丘陵が海岸にせまっているので海岸沿いと丘陵の谷の部分に住宅地が分布する。

小田急江ノ島線、相模鉄道線沿いは一部畑が残っているが、ほぼ連続して宅地化している。

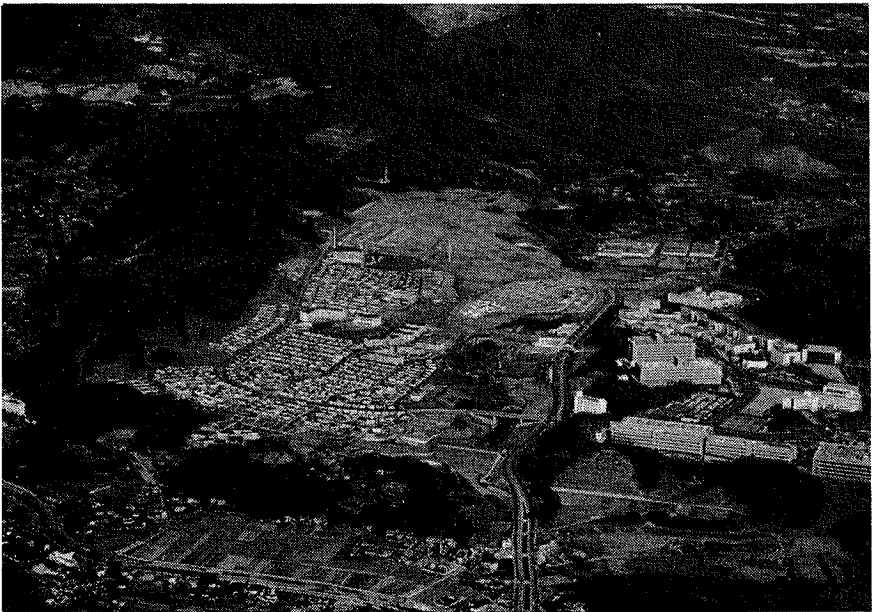
小田急小田原線沿いは駅を中心に住宅地が分布する。駅と駅の間にはまだ水田や畑が残っており、不連続に宅地化している。

JR相模線沿いは宅地化があまり進んでいないので水田や畑が広く残っている。

2.3 商工業等用地

2.3.1 工業用地

工業用地は東海道線沿いと相模川沿いに多く分布する。東海道線に沿って東



現在開発中の厚木市森の里。写真右側の大きい建物は民間の研究所や大学。(昭和63年1月)

から日本精工、ソニー、松下電器、関東特殊製鋼（以上藤沢）、東陶機器、宮田工業（以上茅ヶ崎）、平塚製鋼、日本たばこ（以上平塚）、NCR、ジョンソン（以上大磯）等の工場がある。

相模川沿いに下流から横浜ゴム、パイロット、日産車体、三共、三菱樹脂、古河電工、関西ペイント（以上平塚）、東邦チタニウム（茅ヶ崎）、日東タイヤ、日産工機、日本鋳業（以上寒川）、日立製作所、日本ロックラーパイプ（以上海老名）、ソニー、三菱自動車、セキスイソフラン（以上厚木）等の工場がある。

その他、内陸の工業用地として、いすゞ自動車、桐原工業団地（以上藤沢）、東芝機械、日産自動車（以上大和）、伊勢原内陸工業団地等がある。

2.3.2 商業用地

商業用地は東海道線、小田急線、相模鉄道線の全ての駅周辺に集中している。その中でも商業用地が広いところは藤沢、茅ヶ崎、平塚、本厚木、大和の各駅周辺である。その内、藤沢、平塚、本厚木の駅周辺にはデパート、スーパーなどの大規模小売店舗が多い。その外、江ノ島、片瀬海岸から大磯にかけての国道134号沿いに点々と商業用地が認められる。

旅館、ホテルは江ノ島、片瀬と飯山、七沢に多い。

2.3.3 業務用地

業務用地は藤沢、平塚、本厚木の駅周辺に多く分布する。平塚から厚木までの国道129号沿いに所々業務用地がみられる。その外厚木市西部に日産テクニカルセンターや富士通、NTT、キャノンの研究所等業務用地が広く分布する。

2.3.4 運輸流通施設用地

運輸流通施設用地としては茅ヶ崎操車場、大磯の相模貨物駅、平塚市田村のバス操車場がある。厚木インターチェンジの近くには倉庫がみられる。湘南海岸には江ノ島湘南港、茅ヶ崎港、平塚須賀港、大磯港の港湾施設がある。その内湘南港は公営のヨットハーバーとして利用されている。その他の港は主に観光漁業に利用されている。その外鉄道の駅周辺に駐車場が多い。

2.4 公園等

2.4.1 ゴルフ場・遊園地等

ゴルフ場は芙蓉、藤沢（以上藤沢）、湘南カントリー、スリーハンドレット、

茅ヶ崎、湘南シーサイド（以上茅ヶ崎）、レイクウッド、富士見（以上平塚）、ロングビーチ（大磯）、本厚木、厚木国際、大厚木（以上厚木）、清川カンントリー（清川）がある。

遊園地はドリームランドと大磯ロングビーチが大きい。

2.4.2 公園用地、墓地

大きい公園としては湘南海岸公園、辻堂海浜公園（以上藤沢）、総合運動公園、高浜台公園（以上平塚）、引地台公園（大和）、七沢森林公園、若宮公園（以上厚木）がある。大きい寺社には竜口寺、遊行寺、平塚八幡宮がある。墓地は大庭台墓園が大きい。

2.5 公共施設等

2.5.1 教育文化体育施設

大学は日本大学、相模工業大学（藤沢）、文教大学（茅ヶ崎）、東海大学（平塚）、青山学院大学、幾徳工業大学等（厚木）がある。

体育施設は県立体育センター、県営グラウンド、平塚総合グラウンド、専修大学グラウンド、成城学園グラウンド等がある。

2.5.2 その他の公共施設

公共施設としては市町村の庁舎があり、大部分は市町村の中心地に所在する。藤沢市、平塚市、厚木市には県合同庁舎がある。相模川の両岸には企業庁水道局の施設や下水道処理施設がある。

2.6 その他

2.6.1 防衛施設

防衛施設としては厚木飛行場、米軍上瀬谷通信隊、米軍座間キャンプがあり、米軍座間キャンプの南半分が本図幅含まれる。

2.6.2 工事中造成地

伊勢原市石田、平塚市岡崎に宅地造成中の所がある。

2.6.3 海浜

藤沢から二宮までの相模湾に面している所に海浜がある。

2.6.4 道路・鉄道

幹線道路は国道1号、国道129号、国道134号、国道246号、国道412号、東名高速道路、小田原厚木道路がある。

鉄道は東海道新幹線、東海道線、相模線、小田急小田原線、小田急江ノ島線、相模鉄道線がある。本図幅内に新幹線の駅はない。

2.6.5 その他

宅地造成後の空き地は湘南ライフタウン、平塚市日向に分布する。

3 土地利用の変化

湘南から県央にかけては気候が温暖で、東京・横浜からの交通の便が良く、地形も台地や平野が多く、首都圏の住宅地として最も優れている所の一つである。一般に昭和48年暮れのオイルショック以後土地利用の変化は少ないが、湘南、県央はその後も住宅地が増加している。土地利用履歴図（昭和49年と昭和61年の比較）をみると、大規模に宅地化したところは二宮町富士見が丘、大磯町石神台、平塚市高村・山下、藤沢市ライフタウン、茅ヶ崎市高田、伊勢原市高森、厚木市森の里・毛利台・宮の尾・鳶尾、座間市東建ハイツ、横浜市瀬谷区いずみ野等がある。その外、中小規模の宅地開発が各所にみられる。

住宅地以外で変化の目だところは藤沢市で大清水高校、下水処理場、湘南スポーツセンター（荏原製作所跡）、卸売市場、桐原工業団地、平塚市で総合運動公園（農業試験場跡）、厚木市で日産テクニカルセンター、森の里の研究所群、伊勢原市で大学及び市営グラウンド、大和市で引地台公園（旧厚木飛行場の一部）等である。

今までは5年毎の都市計画法に基づく市街化区域の拡大や市街化調整区域内の大型開発によって住宅地が増加してきた。最近住宅ローン、公庫の金利の引き下げや都心部の地価高騰による県内への移住で宅地需要が非常に増しているので、今後県内の宅地化がさらに促進される可能性が高い。

このよう状況で新神奈川計画で述べられている良好な住環境を湘南・県央で実現するためには行政が思い切った規制・指導と道路、橋、公園、下水道等の公共投資を行う必要がある。

参 考 文 献

- 厚木市市史編纂委員会（1970）厚木近代史話
綾瀬市教育委員会（1983）あやせ
茅ヶ崎市（1981）茅ヶ崎市史4 通史編
海老名市教育委員会（1986）わたしたちの海老名
井出栄二（1985）平塚の地誌，稲元屋書籍店
神奈川県（1962～1986）県勢要覧
神奈川県（1986）第二次新神奈川計画，地域計画
児玉幸多（1983）藤沢－わが町のあゆみ－，藤沢市文書館
大和市（1979）大和市長5 資料編近現代上
座間美都治，神崎彰利（1984）わが町の歴史・相模原，文一総合出版
明細地図社（1985）明細地図藤沢市（南部版）
明細地図社（1985）明細地図藤沢市（北部版）
明細地図社（1986）明細地図茅ヶ崎市
明細地図社（1984）明細地図平塚市（東部版）
明細地図社（1984）明細地図平塚市（西部版）
明細地図社（1983）明細地図大磯町二宮町
明細地図社（1984）明細地図大和市
明細地図社（1985）明細地図綾瀬市
明細地図社（1984）明細地図海老名市
明細地図社（1985）明細地図厚木市（南部版）
明細地図社（1985）明細地図厚木市（北部版）
明細地図社（1984）明細地図伊勢原市
経済地図社（1984）明細地図座間市

大木 靖 衛
杉山 茂 夫
長瀬 和 雄
小鷹 滋 郎

V 自然災害履歴図

目 次

| | |
|-------------|----|
| 1 自然災害履歴概説 | 88 |
| 2 自然災害履歴細説 | 89 |
| 2.1 水 害 | 89 |
| 2.2 斜面崩壊 | 91 |
| 2.3 地震による災害 | 93 |
| 2.4 津波・高潮 | 93 |
| 2.5 火山噴火 | 94 |
| 神奈川県自然災害年表 | 95 |
| 参 考 文 献 | 99 |

1 自然災害履歴概説

当図幅地域の中央を相模川が流れ、相模湾に注いでいる。相模川は厚い沖積層を堆積し、相模平野を形成している。相模平野の東には第四紀の高座丘陵、相模原台地が広がっている。平野の西側には高麗山地、大磯丘陵、丹沢山地およびその周辺の台地等、第四紀の丘陵・台地、第三紀の山地が分布している。

相模湾には地震の巣と言われている相模トラフが有り、過去に多くの巨大地震を発生させ、津波を引き起こしてこの地域に大きな被害をもたらした。今後もこの地域は巨大地震に襲われる宿命を持っている。地震によって、山地や丘陵では崖くずれなどの斜面の崩壊が発生し、大雨によって沖積平野では洪水などの水害に襲われる危険性を持っている。

沖積平野は、かつては水田として開発されたが、現在は埋め立てが進み、住宅地などとして利用されるようになった。

相模川の上流には多くの人造湖が建設されており、現在も宮が瀬ダムが建設中である。そのため近年相模川の氾濫による水害は起こっていない。中小河川の改修は年々進んでいるが台風等の集中豪雨により、河水が増水し支流や水路で逆流が生じたりして、河水が氾濫し、住宅地で床下浸水や床上浸水が発生している。特に、水田が宅地が変わったところでは水掃けが悪く、浸水災害が度々発生している所もある。本図幅西部の大磯丘陵、丹沢山地は新第三系と古期ローム層からなり、急斜面が広く分布し、斜面崩壊が多く発生している。相模川西岸の新时期ローム層からなる伊勢原台地、愛甲台地、相模川左岸の古期ローム層からなる高座丘陵、座間丘陵、新时期ローム層からなる相模原台地では、自然斜面ばかりでなく人工斜面などでも崩壊が発生している。

地図に表現した災害資料は市町村の企画課、建設課、消防署等の災害担当部局、神奈川県土木部砂防課、同土木事務所、神奈川県農政部林務課、同治山事務所、神奈川県環境部防災消防課、同環境管理課の協力によって集めた。

この地域は巻末の年表に記したように台風や、ほぼ周期的な地震に襲われている。集中豪雨や地震は災害発生の誘因となっている。災害の都度、各行政機関は詳細な被害報告書を作成したはずであるが、年数が経ち、資料の大部分が散逸しているのが現状である。今回集めることができた災害情報の密度は市町

の単位あるいは河系の単位で著しく不均一であるが、それらを全て地図に表現することを試みた。そのため、地図に多くの災害が記されている市町が、記入のない市町に比べて災害の発生が多いとは限らない。自然災害に積極的に取り組んでいた市・町では資料が良く整理されている所が多い。崖崩れや浸水箇所にはその発生日月日を付記し本資料の利用の便を計った。数十年、数百年毎に来襲する台風、地震、火山噴火などの災害と取り組むためには、長期間にわたる正確な災害資料の蓄積が必要であり、今後の積極的で組織的な資料収集が期待される。

2 自然災害履歴細説

自然災害履歴図には、水害、斜面崩壊、地震、津波・高潮、地盤沈下、火山噴火を図示した。

河川の氾濫、排水不良による床下・床上浸水、田畑の冠水などを水害として一括して図示した。

豪雨や地震によって発生する崖崩れ、山崩れ、人工斜面の崩壊を一括して斜面崩壊とした。また、関東大地震の際に発生した地滑りや規模の小さい土石流も斜面崩壊の区分に入れた。

地震災害は、関東大地震による集落毎の被害状況(全壊、半壊、火災等の割合) 道路の被災状況、および山梨県東部地震、地震による屋根瓦の被害状況を示した。津波・高潮は元禄地震、安政東海地震、関東地震の最大波高を示した。

地盤沈下は昭和43年以後の累積沈下等量線を示した。

火山災害としては宝永年間の富士山の噴火による火山灰の等厚線を図示した。

2.1 水害

当該図幅地域では、相模川のような大河川の氾濫等の水害は近年の資料には見あたらない。この地域の水害を大きく見ると、中小河川(金目川、目久尻川、小出川、引地川、境川、鳩川等)が形成した沖積氾濫平野における河水の溢水・氾濫、湘南砂丘地の後背低地や湿地(千ノ川とその流域の内水等)の溢水、および相模原台地などの水はけの悪いところにおける局所的な冠水に分けることが出来る。これらの地域では近年特に開発が進んでいることも水害の一因となっている。

湘南砂丘のうち平塚市域に属する平塚砂丘については詳細な地形区分が行われている（井出,1985）。これによると、東西に延びる砂丘が南北に十数列並び、巾6kmの平塚砂丘を形成されている。平塚砂丘の東側の東八幡地区は相模川により、西側の花水川に沿った地区は花水川によって砂丘は浸食され、河成堆積物が堆積している。平塚市の水害は砂丘間の低地と花水川の沖積低地に集中している。

災害履歴図には昭和41年～61年の21年間で資料の入手の出来た86回の降雨による水害のうち地図に記入の可能なものを示した。

資料は主に神奈川県土木部河港課発行の各河川流域浸水実績図および各市町が保管している災害関係公文書を用いた。公文書には被害者の住所と氏名が記されており、これを明細地図（明細地図社、経済地図社発行）で位置を確認して災害履歴図に示した。そのため、公文書による資料は点および点の集合として図示されている。浸水地域は住宅の周辺の空き地や農地におよんでいた可能性が強いがそれは表現できなかった。

代表的な水害を記述すると、昭和41年6月28日、台風4号は梅雨前線を刺激し、箱根・丹沢山地に300～400mm、平野部で200～300mm（大和249mm、藤沢317mm）の降雨をもたらした。神奈川県下では横浜・川崎・鎌倉を中心に被害を受け、床上浸水9,651戸、崖崩れ600箇所、死者・不明者37名に達した。当該図



台風18号による浸水（昭和57年9月19日、藤沢市川名一丁目）（神奈川県土木部河港課提供）

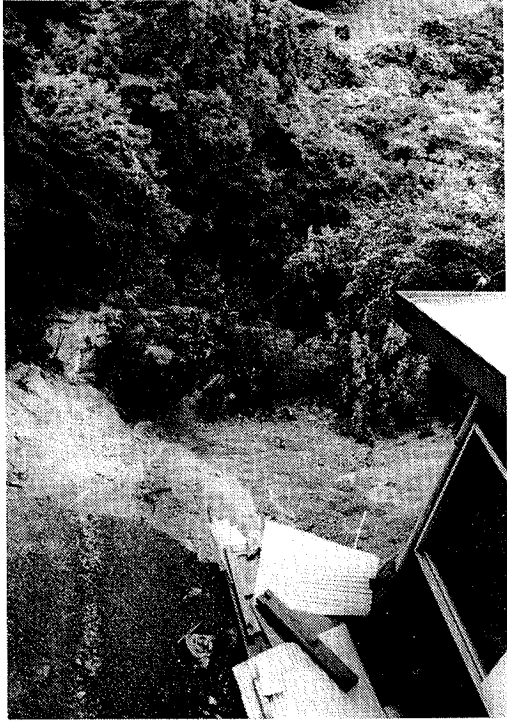
幅には資料が入手できた境川、引地川の冠水状況を図示した。また、この台風の被害は伊勢原市、大和市、寒川町などの公文書に残されている。昭和49年7月の台風8号により8日に藤沢で151mm、長後で117mmの降雨があった。この豪雨による境川の溢水・氾濫の状況を図示した。この台風の被害の記録は、平塚市、伊勢原市海老名市、寒川町、二宮町などの公文書に残っている。昭和51年9月の台風7号は秋雨前線を刺激して、降水量は8～9日にかけて大和で239mm、長後で230mm、海老名では300mmをこえた。この時の引地川、長池川の溢水・氾濫の記録を図示した。昭和57年9月の台風18号は秋雨前線を刺激し、10～12日にかけて降水量は山間部で400～500mm、平野部で200～300mmに達した。この豪雨の被害は横浜、川崎、藤沢に集中した。神奈川県下の被害は死者4名、床上浸水5,082棟、崖崩れ477箇所であった。藤沢の降水量は273mm、寒川でも270mmに達し、藤沢市の被害は死者1名、床上浸水1,463棟、崖崩れ11箇所、茅ヶ崎市の被害は床上浸水29棟、崖崩れ1箇所であった。この豪雨による小出川、千の川流域の浸水域を図に示した。この台風の被害記録は、厚木市、茅ヶ崎市、平塚市、伊勢原市、海老名市、寒川町、二宮町などの公文書に残っている。

2.2 斜面崩壊

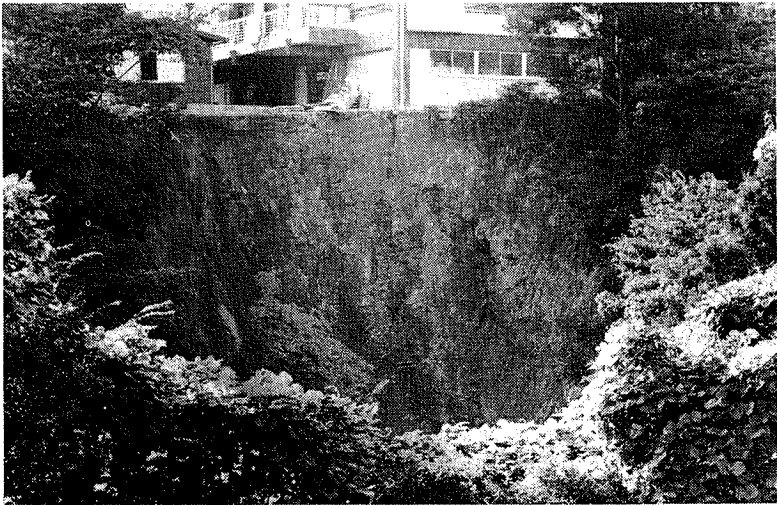
斜面崩壊は山地や丘陵の急斜面、台地や段丘の斜面、道路や宅地造成地の人工斜面で集中豪雨や地震の際に発生する。

高麗山山地や大磯丘陵は開発が進んでいるため崖崩れ災害の資料が多い。代表的な崖崩れを記すと、昭和51年6月15日、大磯駅北方の高麗山地に属する羽白山（112m）の西側斜面（大磯層、斜面区分：急斜面）が14時50分～17時40分の間の52mmの集中豪雨により19時40分に幅16m、長さ26mにわたって崩壊し、260m³の土砂が流出した。斜面の上の住宅の庭の土砂が崩れ去っただけで、家屋や人命に被害はなかった。庭にあった排水口から溢れ出した水により、斜面の地盤が緩んだことが原因と言われている。昭和52年7月12日大磯丘陵峰岸山（75.9m）周辺で午前零時から一時間に50mmの集中豪雨があり、南斜面（鷹取山層、斜面区分：急斜面）が崩壊し、住宅二軒が倒壊した。この日、峰岸山の周辺では8ヶ所で崖崩れが発生した。山の北側で住宅開発がすすみ、山の上にコンクリートの土止めが作られたのが原因と言われた。

丹沢山地、中津山地には、神奈川県農政部林務課に保管されていた関東大地



台風9号による斜面崩壊
(昭和52年9月10日大磯町神明町)
(大磯町役場提供)



震とその直後の山林の復旧事業の施行地を図示した。この資料は震災当時の崖崩れ、地滑り、小規模な土石流による山林の被害を示している。漸新・中新統からなる丹沢山地に被害が集中し、鮮新統からなる中津山地では被害は少ない。これは、丹沢山地に急傾斜地が多いことと、丹沢山地の隆起にともなった激しい地殻変動によって、山体が著しく破碎されていることによる。

2.3 地震による災害

相模湾には日本海溝から北西に相模トラフが走っている。相模トラフでは西側のフィリピン海プレートが北西に走る断層に沿って陸側のプレートの下に潜り込んでいて、相模トラフ周辺では巨大地震が発生している。地震による災害としては震動による建物の倒壊や地盤の液状化などがある。関東大地震時の家屋などの建物の被害については神奈川県震災誌に集落ごとの倒壊率が克明に記載されている。これによると軟弱地盤が分布する相模川低地や湘南砂丘地で倒壊率が高く、全壊の占める割合が50%（厚木町52.5%、平塚町60.8%、茅ヶ崎町65.5%）を越えている。地盤がしっかりしている大磯丘陵、座間丘陵、高座丘陵、相模野台地で倒壊率が低い（全壊率大磯町14.9%、座間村6.0%、大和村1.8%、瀬谷村9.1%）。

地盤の液状化は、相模川低地では砂層が厚く、地下水位が浅いので、地震時には各地で発生した。神奈川県環境部防災消防課の聞き取り調査では厚木市伊勢原市、平塚市、海老名市、寒川町、茅ヶ崎市等相模川兩岸の各地で噴砂、噴水、地割れの現象が報告されている。

2.4 津波・高潮

相模トラフ周辺では巨大地震が発生し、大津波が発生している。過去の記録によると、818年（弘仁9年）の津波を初めとして数回の津波に相模湾岸地域は襲われている。このうち1703年（元禄16年）の元禄地震、1854年（安政元年）の安政東海地震、1923年（大正12年）の関東地震等に伴った津波を災害履歴図に示した。元禄地震に伴う津波の波源域は房総近海にあり、津波は南関東一帯の沿岸を襲い死者は5,200名を越えた。藤沢市片瀬で津波は6.0m、茅ヶ崎市、平塚市、大磯町で2.0mの波高を示し、片瀬一帯の人家は残らず流失した。関東大地震による津波は藤沢江ノ島で3.0～7.1mの波高を示し流失家屋50戸の被害を受け、茅ヶ崎市柳島で小出川が氾濫して田畑が浸水した（神奈川県水害分

科会58年度報告書)。

2.5 火山噴火

有史前から噴火活動していた富士山は歴史時代に入ってから活動も続け、古文書に残された噴火記録だけでも13回以上に達している。801年(延暦21年)4月の噴火では足柄峠に熱い火山岩片が落下し、通行不能となり、箱根道が開かれたと言われている。その後も度々の噴火による降砂によって、神奈川県下では作物が被害を受け、河川が氾濫した。当該図幅地域も被害は甚大で、多くの史料が残されている。1707年(宝永4年)12月16日から同月31日にかけての宝永噴火では降灰後、被害地の村々は村民総出で灰(砂)を取り除き、かき集めて各地に塚(浅間塚)を作った。米の収穫は2割4分も減少し、その後長い期間にわたって減少は続いた。また、この噴火の降砂が原因で宝永6年、宝永7年、正徳4年に恩曾川などの河川が氾濫し、農民の生活をさらに圧迫した。

災害履歴図に表現した宝永噴火によるテフラの等厚線は、下鶴(1981)が古文書等の資料を用いて作成した等厚線図から引用した。当該図幅地域ではその厚さは40~20cmである。

富士山は宝永噴火の例で明らかなように、噴火の被害はほぼ神奈川県下全域にわたって発生し、噴火の後遺症は数十年に渡って続く。富士の火山活動に強い関心を持ち続ける必要がある。

神奈川県自然災害年表

| 年月日 日本暦 | 西暦 | 種類 | 主な災害 | 地記 |
|------------|------|----|---|----|
| 慶長元年 | 1596 | 洪 | 関東・甲信越地方大洪水 | |
| 慶長9年12月16日 | 1605 | 地 | 慶長地震(M7.9) 関東・東海地方 津波の被害大 | |
| 慶長10年8月10日 | 1605 | 洪 | 関東地方大風雨 大洪水 | |
| 慶長13年6月11日 | 1608 | 洪 | 関東地方洪水 | |
| 慶長19年8月28日 | 1614 | 台 | 東海道・関東大風雨 | |
| 寛永4年8月 | 1627 | 洪 | 関東・東海道洪水 | |
| 寛永7年8月15日 | 1630 | 洪 | 金目川洪水 | |
| 8年5月8日 | 1631 | 津 | 相模に津波 | |
| 10年1月20日 | 1633 | 地 | 南関東に大地震(M7.1) 小田原城倒壊 箱根山崩れ | |
| 正保4年5月14日 | 1647 | 地 | 関東地震(M6.4) | |
| 慶安元年4月22日 | 1648 | 地 | 小田原地震(M7.1)小田原城破損 | |
| 2年6月21日 | 1649 | 地 | 関東地震(M7.1) | |
| 7月25日 | | 地 | 〃(M6.4) | |
| 承応2年6月7日 | 1653 | 洪 | 酒匂川出水 | |
| 明暦元年8月10日 | 1655 | 台 | 大風雨 小田原領被害甚大 | |
| 万治2年6月2日 | 1659 | 洪 | 関東大風雨 被害甚大 | |
| 3年8月 | 1660 | 洪 | 酒匂川大洪水 岩流瀬堤決壊 田畑に被害 | |
| 寛文2年6月 | 1662 | 洪 | 東海道・関東大風雨 | |
| 8月 | | 洪 | 酒匂川岩流瀬堤決壊 | |
| 10年6月3日 | 1670 | 洪 | 相模地方洪水 | |
| 延宝元年8月9日 | 1673 | 台 | 相武地域大風雨 | |
| 3年2月24日 | 1675 | 洪 | 酒匂川出水 | |
| 8年8月6日 | 1680 | 豪 | 東海道大風雨 | |
| 延宝8年9月20日 | 1680 | 台 | 台風による小田原城破損 | |
| 天和2年 | 1682 | 洪 | 酒匂川洪水 岩流瀬堤決壊 | |
| 元禄7年7月 | 1694 | 洪 | 東海大風雨小田原に高潮 | |
| 8年7月15日 | 1695 | 洪 | 酒匂川大洪水岩流瀬堤決壊 田畑流失 | |
| 13年6月 | 1700 | 洪 | 〃 | |
| 〃 | | 火 | 富士山噴火 | |
| 16年11月23日 | 1703 | 地 | 元禄地震(M8.2) 津波有り 小田原の死者2,291名 | ★ |
| 17年2月 | 1704 | 洪 | 酒匂川大洪水 | |
| 宝永2年6月30日 | 1705 | 洪 | 酒匂川大洪水 岩流瀬堤決壊 | |
| 宝永4年10月4日 | 1707 | 地 | 宝永地震(M8.4) 小田原被害 | |
| 11月23日 | | 火 | 富士山噴火 足柄平野降灰多量 南足柄市厚さ50cm | ★ |
| 宝永4年 | | 洪 | 酒匂川 川さらい 大口堤決壊 | |
| 5年6月22日 | 1708 | 洪 | 酒匂川洪水 大口・岩流瀬堤決壊 | |
| 正徳元年7月27日 | 1711 | 洪 | 酒匂川洪水 大口堤決壊 足柄平野大半が水没 酒匂川平野中央部を分流する | |
| 享保10年 | 1725 | 洪 | 酒匂川洪水 | |
| 13年9月2日 | 1728 | 洪 | 酒匂川洪水 | |
| 19年8月7日 | 1734 | 洪 | 大口・岩流瀬堤決壊 足柄平野大洪水 | |
| 宝暦13年2月 | 1763 | 洪 | 酒匂川洪水で向原、吉田島の堤防が決壊 | |
| 寛政3年 | 1781 | 洪 | 大口堤決壊し吉田島、曾比、栢山、他数村流失 | |
| 天明2年7月15日 | 1782 | 地 | 小田原に地震(M7.3) 小田城櫓3ヶ所民家1000戸破損 | |
| 6年2月24日 | 1786 | 地 | 箱根に地震 双子山崩れ芦の湯・底倉温泉破壊 | |
| 寛政3年8月6日 | 1791 | 洪 | 関東大風雨箱根山崩れ 酒匂川氾濫 足柄下郡高潮 | |
| 享和2年6月30日 | 1802 | 洪 | 大風雨酒匂川洪水 岩流瀬堤決壊 箱根温泉場流失 | |
| 3年 | 1803 | 洪 | 大口・岩流瀬堤決壊、栢山、穴部新田、井細田、山王原左岸では 大井、成田、飯泉 被害 | |

| | | | | |
|-------------------|------|---|--|---|
| 天保14年 2月9日 | 1843 | 地 | 小田原に地震 (M6.3) 小田原城破損 | |
| 嘉永 6年 2月 2日 | 1853 | 地 | 小田原付近に地震 (M6.5) 死者24名 民家3300崩壊 | |
| 安政元年11月 4日 | 1854 | 地 | 安政東海地震 (M8.4) 房総一土佐に津波 露国艦破損 | ★ |
| 2年10月 2日 | 1855 | 地 | 江戸地震 (M6.9) | |
| 4年 | 1857 | 洪 | 酒匂川氾濫 足柄平野一帯に出水 | |
| 元治元年 8月 | 1864 | 洪 | 関東地方暴風雨 水害多し | |
| 明治 8年 1875年8月10日 | | 洪 | 大雨 各地で堤防決壊 | |
| 10年 1877年 7月26日 | | 台 | 小田原に激浪 流失家屋15戸 全半壊99戸 | |
| 27年 1894年 6月20日 | | 地 | 東京湾北部地震 (M7.5) 小田原被害あり | |
| 29年 1896 | | 洪 | 吉田島堤崩壊 | |
| 35年 1902年 9月28日 | | 台 | 台風により小田原に高潮 死者12名 負傷者184名 県下では死者60名、負傷者369名、不明12名 | |
| 37年 1904年 7月 9日 | | 台 | 台風により県中部から西部にかけ400mm以上の豪雨 厚木で484.1mm 県下の山・崖崩れ1360ヶ所 | |
| 39年 1906年 | | 洪 | 豪雨のため相模川が氾濫した | |
| 43年 1910年 | | 台 | 前線、台風により県西部に豪雨 降水量山地で1000mm以上 平地で500-600mm 大涌沢地滑りその他山崖崩れ2,258ヶ所 酒匂川栢山堤決壊 厚木で半壊4戸、床上浸水47戸、 床下浸水134戸、破損1戸 | |
| 44年 1911年 7月25日 | | 台 | 箱根で降水量300-800mm、県下で死者29名、負傷者57名 | |
| 大正 3年 1914年 8月12日 | | 台 | 中津川、小鮎川氾濫 | |
| 6年 1917年 9月30日 | | 台 | 厚木で全壊59戸、半壊23戸、床上浸水28戸、床下浸水 209戸、堤防決壊20m、橋梁流失破損8箇所 愛川で全壊6戸 | |
| 9年 1920年 9月29日 | | 台 | 台風で三保地区で土石流 横浜、鎌倉、藤沢で降水量350-500mm、 県下で死者65名、負傷者42名 | |
| 12年 1923年 9月 1日 | | 地 | 関東大地震 (M7.9) 被害は県全域 死者29,614名 | ★ |
| 13年 1924年 1月15日 | | 地 | 丹沢山地 (M7.2) 県中南部に被害多し死傷480名 厚木で死傷者31名、全壊52戸、半壊462戸 | |
| 9月16日 | | 豪 | 中津川氾濫 半原で流出3戸 浸水88戸 | |
| 14年 1925年 9月30日 | | 台 | 横浜、藤沢、横須賀で降水量250-400mm、県下の死者28名、 負傷者20名、崖崩れ多数 | |
| 昭和 5年 1930年11月26日 | | 地 | 北伊豆地震 (M7.0) 早川、酒匂川に多量の土砂 | |
| 7年 1932年11月14日 | | 台 | 台風 降水量秦野、大磯、三浦で200-250mm、県下の死者 26名、負傷者95名、家屋全壊6572戸 | |
| 12年 1937年 7月16日 | | 豪 | 前線により県東部、特に山北、松田、南足柄に豪雨 県下の死傷者58名 降水量山岳地帯で400-700mm | ★ |
| 13年 1938年 6月27日 | | 台 | 台風 相模川支流の金目川、鶴見川、多摩川、酒匂川 (吉 田島堤決壊) で氾濫 平地で200-400mm 山間部で400-800mm 死者6名 家屋全壊719戸 | |
| 8月31日 | | 台 | 降水量丹沢で600mm以上、県下の死者 6名、負傷者19名 愛川町で中津川の堤防決壊し半原で床上浸水38戸、 床下浸水 6戸、中津南下谷堤防の決壊で床上・床下浸水 30戸 | |
| 16年 1941年 7月11日 | | 豪 | 前線による豪雨 死傷者36名 | |
| 7月22日 | | 台 | 台風により河川氾濫 2万戸浸水 | |
| 19年 1944年10月 7日 | | 台 | 台風により8000戸浸水 死傷者21名 | |
| 22年 1947年 9月14日 | | 台 | カスリーン台風により箱根丹沢山岳地に豪雨 死傷者11名 降水量300-700mm | |
| 23年 1948年 9月16日 | | 台 | アイオン台風により県西部山岳地に豪雨 降水量箱根 仙石原で743.3mm 県下の死者19名、負傷者23名 酒匂川の支流狩川の氾濫で被害甚大、愛川町で中津川大洪 水 半原、角田地先などで堤防決壊 | |
| 24年 1949年 8月31日 | | 台 | キテイ台風で箱根、丹沢の降水量200-400mm、県下の死 | |

| | | | | |
|-----|------------|---|--|---|
| 25年 | 1950年9月4日 | | 者22名、負傷者87名 ジェーン台風で中津川天王森付近の堤防決壊 田代地区で床上浸水21戸 | ★ |
| 27年 | 1952年6月22日 | 台 | ダイナ台風厚木付近を通過 | |
| 28年 | 1953年7月26日 | | 早雲山地滑りの発生 流失土砂量800,000m ³ | |
| 33年 | 1958年9月15日 | 台 | 台風21、22号による豪雨 21号降水量120-360mm山崖崩れ57ヶ所 22号降水量200-500mm山崖崩れ821ヶ所 | |
| | ◇ 9月26日 | 台 | 狩野川台風 箱根で降水量400mm、県下の死者93名、負傷者167名 愛川町で塩川ぞいの水田3mの冠水 | |
| 34年 | 1959年8月13日 | 台 | 台風7号による豪雨 酒匂川(吉田島)の堤決壊 厚木で相模川の堤防約500mにわたって護岸洗掘 愛川町の高田橋、馬渡橋の橋台一部流出 | |
| 36年 | 1961年6月24日 | 豪 | 梅雨前線による豪雨 死傷者110名 県下の山崖崩れ873ヶ所 降水量平地で200-300mm 山岳地で300-800mm | |
| 40年 | 1965年9月17日 | 台 | 台風24号 厚木で全壊1戸、半壊7戸 愛川町で半壊1戸 | |
| 41年 | 1966年6月27日 | 台 | 台風4号による豪雨 箱根で降水量300-400mm、県下の死者28名、負傷者63名、山崖崩れ609ヶ所 厚木で床上・床下浸水910戸、流出・冠水田畑1,697ha 愛川町で死者1名、全壊1戸、床上浸水2戸、床下浸水25戸、崖崩れ1 相模原で全壊3、床上浸水233、床下浸水306戸 | ★ |
| | ◇ 9月25日 | 台 | 台風26号厚木で全壊・半壊家屋82戸、一部破損185戸 愛川で全壊4戸、半壊17戸、床上浸水1戸、床下浸水18戸 相模原で全壊13、半壊519、床上浸水58、床下浸水41戸 | ★ |
| 45年 | 1970年6月15日 | 豪 | 14-15日 仙石原で降水量437mm | |
| 46年 | 1971年8月31日 | 台 | 台風23号小鮎川の堤防20mにわたって護岸洗掘 相模原で床上浸水42、床下浸水293 | ★ |
| | ◇ 9月26日 | 台 | 台風29号、相模原で床上浸水42、床下浸水263 | ★ |
| 47年 | 1972年7月12日 | 豪 | 厚木で全壊4戸、半壊7戸、床上浸水21戸、床下浸水29戸 愛川の中津川堤防3箇所で決壊、全壊3戸、半壊3戸、床上浸水26戸、床下浸水120戸 相模原で全壊1、床上浸水439、床下浸水1,094 | |
| | ◇ 7月15日 | 台 | 台風6号、相模原で半壊1、床上浸水85、床下浸水336 | ★ |
| | ◇ 9月15日 | 台 | 台風20号による集中豪雨で山北町北部に土石流発生 降水量山北町で250-530mm県下死傷者27名 山・崖崩れ299ヶ所 厚木で負傷者1名、半壊1戸、床上浸水21戸、床下浸水76戸、愛川で床上浸水2戸、床下浸水32戸、堤防崩壊5ヶ所、相模原で床上浸水34、床下浸水151、半壊5、一部破損3戸 | ★ |
| 48年 | 1973年4月18日 | 豪 | 16-17日 仙石原で降水量84mm | |
| | ◇ 6月21日 | 豪 | 厚木で床下浸水5戸 | ★ |
| | ◇ 10月14日 | 豪 | 相模原で床上浸水6、床下浸水36 | ★ |
| | ◇ 11月11日 | 豪 | 小田原で9-10日に降水量95mm 相模原で床上2、床下36 | ★ |
| 49年 | 1974年6月18日 | 豪 | 相模原で床上浸水1、床下浸水18 | ★ |
| | ◇ 7月7日 | 豪 | 前線による集中豪雨で横須賀地区に大災害 降水量232mm 県下の死傷者34名、崖崩れ1610ヶ所 相模原で床上浸水7、床下浸水67戸 | ★ |
| | ◇ 8月25日 | 台 | 台風14号 愛川町で崖崩れ6ヶ所、床下浸水4戸 相模原で半壊1、床上浸水8、床下浸水108 | ★ |
| | ◇ 9月1日 | 台 | 台風16号厚木で床下浸水29戸 愛川町崖崩れ5ヶ所、死者1名 相模原で床下浸水106戸 | ★ |
| 50年 | 1975年3月21日 | 豪 | 相模原で床上浸水5、床下浸水54 | ★ |
| | ◇ 6月10日 | 豪 | 相模原で床上浸水3、床下浸水128 | ★ |
| | ◇ 7月4日 | 豪 | 厚木で床下浸水22戸 相模原で床下浸水28 | ★ |

| | | | | |
|-----|------------|---|---|---|
| | 7月21日 | 豪 | 相模原で床上浸水5、床下浸水113 | ★ |
| | 10月5日 | 台 | 台風13号厚木で床下浸水7、相模原で床上25床下267 | ★ |
| | 11月7日 | 豪 | 相模原で床下浸水6 | ★ |
| 51年 | 1976年9月9日 | 台 | 台風17号相模原で床上浸水172、床下浸水832 | ★ |
| 52年 | 1977年5月15日 | 豪 | 相模原で床上浸水2、床下浸水156 | ★ |
| 〃 | 7月3日 | 豪 | 相模原で床上浸水15、床下浸水167 | ★ |
| 〃 | 7月6日 | 豪 | 相模原で床上浸水1、床下浸水29 | ★ |
| 〃 | 7月7日 | 豪 | 相模原で床上浸水10、床下浸水35 | ★ |
| 〃 | 8月18日 | 豪 | 相模原で床下浸水93 | ★ |
| 〃 | 9月9日 | 台 | 台風9号 相模原で床下浸水154 | ★ |
| 〃 | 9月19日 | 台 | 台風11号 相模原で床下浸水5 | ★ |
| 53年 | 1978年4月6日 | 豪 | 相模原で床上浸水205、床下浸水620 | ★ |
| 〃 | 4月18日 | 豪 | 相模原で床下浸水3 | ★ |
| 〃 | 7月11日 | 豪 | 10-11日仙石原で降水量116mm、相模原で床上浸水173 床下浸水1,345 | ★ |
| 54年 | 1979年3月24日 | 豪 | 相模原で床上浸水4、床下浸水44 | ★ |
| 〃 | 4月8日 | 豪 | 相模原で床下浸水18 | ★ |
| 〃 | 5月8日 | 豪 | 相模原で床下浸水11 | ★ |
| 〃 | 8月20日 | 豪 | 相模原で床下浸水19 | ★ |
| 〃 | 9月4日 | 台 | 台風12号 相模原で床上浸水1、床下浸水9 | ★ |
| 〃 | 10月1日 | 台 | 台風16号 相模原で床下浸水8 | ★ |
| 〃 | 10月9日 | 豪 | 元箱根で 7-8日に降水量124mm | ★ |
| 〃 | 10月19日 | 台 | 台風20号 厚木で負傷者5名、全壊3戸、半壊18戸床上浸水 3戸、床下浸水38戸 崖崩れ6ヶ所 愛川町で中津川左岸堤 防130m崩壊、半壊7戸、一部破損25戸、床下浸水3戸、崖 崩れ9ヶ所 相模原で負傷6人、半壊2、一部破損175戸 床上 浸水7、床下浸水15戸 | ★ |
| 55年 | 1980年4月15日 | 豪 | 降水量13-14日に仙石原で249mm | ★ |
| 〃 | 5月15日 | 豪 | 相模原で床下浸水2 | ★ |
| 〃 | 9月11日 | 台 | 台風13号 相模原で床下浸水12 | ★ |
| 〃 | 10月14日 | 台 | 台風19号 相模原で床下浸水4 | ★ |
| 56年 | 1981年4月20日 | 豪 | 相模原で床上浸水5、床下浸水39 | ★ |
| 〃 | 10月22日 | 台 | 台風24号 厚木で床下浸水16戸、相模原で床上1、床下50 | ★ |
| 57年 | 1982年8月1日 | 台 | 台風10号 愛川町で一部破損3戸、床下浸水5戸、崖崩れ1 ヶ所 相模原で一部破損10戸、床下浸水27戸 | ★ |
| 〃 | 30日 | 豪 | 相模原で床上浸水3、床下浸水10 | ★ |
| 〃 | 9月12日 | 台 | 台風18号 愛川町で床下浸水8戸、崖崩れ4ヶ所 相模原で負傷1、床上浸水32、床下浸水191戸 | ★ |
| 〃 | 11月30日 | 豪 | 小田原で降水量134mm、相模原で床上浸水4、床下浸水53 | ★ |
| 58年 | 1983年5月18日 | 豪 | 元箱根で15-16日に降水量247mm | ★ |
| 〃 | 6月10日 | 豪 | 相模原で床上浸水4、床下浸水3 | ★ |
| 〃 | 8月15日 | 台 | 台風5・6号 降水量15-16日に仙石原で894mm 相模原で床上浸水3、床下浸水38 | ★ |
| 59年 | 1984年6月23日 | 豪 | 仙石原で降水量111mm | ★ |
| 〃 | 7月27日 | 豪 | 雷雨 相模原で負傷1、床上浸水105、床下浸水54 | ★ |
| 〃 | 8月13日 | 豪 | 相模原で床下浸水19 | ★ |

豪：豪雨 洪：洪水 台：台風 地：地震 火：火山噴火 津：津波 ★：災害履歴図に記載
(神奈川の砂防, 理科年表, 酒匂川洪水と防備の歴史, 神奈川県温泉地学研究所報告, 神奈川の気象と
災害による)

参 考 文 献

<地震>

- 今村明恒 (1925) 関東大地震調査報告, 震災豫防調査会報告第100号 (甲), 1-66
神奈川県 (1927) 神奈川県震災誌
田中貢太郎・高山辰三 (1924) 日本大震災誌, 帝国教育研究会
神奈川県 (1927) 神奈川県震災誌および大地震写真帳
金井圓・石井光太郎 (1971) 神奈川の写真誌—関東大地震, 有隣堂
大木靖衛 (1977) 関東大地震のあなたの体験を記録に残そう, 神奈川県温泉地学研究所
報告, Vol.9, No.2, 1
防災専門図書館 (1978) 防災専門図書館所蔵地震関係図書目録
神奈川県 (1983) 大震災写真帖復刻版, 神奈川新聞社
消防科学センター (1984) 地域防災データ総覧, 地震災害・火山災害編

<気象・土木・その他>

- 小橋澄治 (1974) 切取のり面の安定度予測法の検討, 鉄道技術研究所報告, No.895, 1-43
最上武雄・福田秀夫 (1977) 現場技術者のための土質工学, 鹿島出版会
山村和也・鈴木音彦 (1977) 現場監督者のための土木施工, 鹿島出版会
建設省土木研究所 (1978) 急傾斜地崩壊の実態とその対策, 土研資料1383号, 1-305
武居有恒 (1981) 地滑り・崩壊・土石流, 鹿島出版会
防災専門図書館 (1984) 防災専門図書館所蔵災害一般関係図書目録
井出栄二 (1985) 平塚の地誌, 稲元屋書籍店

<神奈川県>

- 神奈川県土木部 (1972) 神奈川の急傾斜地対策事業
神奈川県土木部 (1973) 昭和47年度水害調査報告書
神奈川県土木部 (1980) 神奈川の砂防
神奈川県防災消防課 (1981) 安政地震史料 (古文書) に関する調査研究
神奈川県環境部 (1982) 昭和57年台風18号による被害と対策
神奈川県 (1984) 神奈川県地震被害想定調査委員会津波水害分科会昭和58年度報告書
神奈川県厚木土木事務所 (1986) 厚木土木事務所管内図
神奈川県農政部 (1986) 林務課内部資料

<市町村>

- 厚木市史編さん委員会 (1975) 厚木市史史料集 (9) 災害編
厚木市 (1982) 東海地震における厚木市の被害想定
厚木市企画調整部 (1982~) 昭和57、58、60年度災害資料
厚木市防災会議 (1983) 厚木地域防災計画

大和市企画部（1966～）昭和41、46、47、49、50、51、52、53、54、55、56、57年度災害資料

大和市消防本部（1985）地震対策基礎調査報告書

愛川町防災会議（1985）愛川町地域防災計画

愛川町消防本部（1986）愛川町消防本部管内災害資料

二宮町（1980）警戒宣言が出たとき

二宮町（198 ）近代二宮のあしあと

二宮町（198 ）二宮町防災地図

二宮町消防本部（1971～）昭和46、47、48、49、57、59、60年度災害資料

中井町（1981）中井町土地利用基本構想

中井町企画課（1969～）昭和44、45、46、47、48、49年度災害資料

座間市消防本部（1978～）昭和53、54、55、56、57、58、59、60年度災害資料

座間市消防本部（1984）座間の語り伝え、外編・関東大地震

相模原市（1970～）昭和45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60年度災害資料

伊勢原市消防本部（1970～）昭和49、50、51、52、57、58、59、60年度災害資料

海老名市消防本部（1974～）昭和49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60年度災害資料

綾瀬市消防本部（1973～）昭和48、49、51、52、54、56、57、58、60年度災害資料

平塚市消防本部（1974～）昭和49、51、52、57、58年度災害資料

茅ヶ崎市消防本部（1970～）昭和45、46、47、48、51、52、54、55、56、57、58、59、60、61年度災害資料

藤沢市建設局（1986）建設局災害関係内部資料

大磯町企画課（1971～）昭和46、47、48、49、51、52、57、58、59年度災害資料

寒川生活情報課（1976～）昭和51、57年度災害資料

大木 靖 衛

長瀬 和 雄

小鷹 滋 郎

杉山 茂 夫

小池 敏 夫

1988年3月 印刷発行

土地分類基本調査

藤 沢 ・ 平 塚

編集発行 神奈川県企画部企画調整室
横浜市中区日本大通1
電話 (045) 201-1111

印 刷 (株) 武 揚 堂
東京都中央区日本橋3-8-16
電話 (03) 271-2451